



お知らせ

今回の水稻情報から、ペーパーレス化の推進のため、つくば普及センターHPでの公開とメール配信になりました。引き続きどうぞよろしくお願いいたします。

もうすぐ田植えですね！今年も暖かい気象の予報が出ています。
苗の焼けや伸びすぎ、病害の発生などにご注意ください。



1. 育苗期に発生する病害への対策

(1) 主な病気と原因・症状

育苗期間は、育苗箱周辺の温度や湿度の条件によって、さまざまな病気が発生します。

病気の種類	主な症状	主な発生原因
苗立枯病 (リゾプス菌)	床土の表面が白色のカビで覆われ、やがて灰白色になる。	出芽時の高温 (30℃以上)
苗立枯病 (ピシウム菌)	坪状に発生し、地際部が水浸状に褐変腐敗し、地上部は萎凋・枯死する。	緑化期の低温 (10℃以下)
苗立枯病 (フザリウム菌)	モミを中心に白色～淡赤色のカビが発生する。	緑化期の低温 (10℃以下)
もみ枯細菌病	茎基部の褐変、白化、葉身基部の白化などの症状が坪状に発生し、枯死する。芯葉を引っ張るとするっと抜け基部に褐色帯がみられる。	高温 (30℃超) 多湿、汚染土壌、罹病種子の使用
ばか苗病	第一葉鞘、新葉が徒長する。	罹病種子の使用、高温多湿
ムレ苗	日中葉身が針状に巻き、次第に黄褐色に変わり、ひどくなると褐変枯死する。	急激な温度変化 (低温が2～3日続いた後に高温)、多湿

(2) 対策

病気は、発生を未然に防ぐことが最も重要です。

適切な温度、水管理で発病しにくい環境を整えると同時に、各病気に予防効果のある農薬を使用しましょう。緑化期を過ぎると散布可能な薬剤が限られてくることから、対策は早めに行いましょう。

発病してしまった場合 (特に被害程度が大きい時) には、まき直しや知人などからの苗の確保を検討しましょう。被害程度が小さく、一部のみが発病している場合には、病株を廃棄し、適切な管理を行いましょう。

また、苗立枯病 (ピシウム菌・フザリウム菌) やムレ苗が発生した場合には、下表の農薬を散布しましょう。さらにムレ苗の場合、2葉以上で移植が可能になったら、できるだけ早く移植しましょう。

表

薬剤名	適用病害又は使用目的	希釈 倍数	使用 方法	使用 時期	本剤の 使用回数
タチガレエース M液剤	苗立枯病（ピシウム菌）、 苗立枯病（フザリウム菌）、 移植時の活着促進、 根の生育促進、ムレ苗防止	500～ 1000 倍	土壌 灌注	は種時 又は 発芽後	1 回

1 2024年4月1日現在の登録内容です。

2 資料の作成に当たっては、農薬使用基準の内容について細心の注意をはらっていますが、農薬を使用する方は、必ず、使用する前にはラベルを見て、対象作物、希釈倍数や使用量、使用時期、使用回数等を確認し、農薬の誤った使用を行わないようにしてください。

3 また、農薬の新しい安全性評価の導入等にもない、直ちに使用方法を変更するよう注意喚起される場合があります。その場合は、ラベルの使用方法ではなく、変更後の使用方法に従って使用してください。最新の情報は、農薬の購入先や茨城県病害虫防除所のホームページ等で確認してください。

2. 田植え後の初期管理のポイント ～除草剤の使い方と分けつ促進～

(1) 除草剤を使用するときの注意点

水稻の初中期除草剤の効果をも十分に発現させるには、水管理を適正に行うことが重要です。
除草剤散布後、1週間程度は掛け流しや落水をしないようにしましょう。

田面が露出すると、除草剤の効果が低下し、雑草が繁茂してしまいます。田面が露出しそうなときは、あふれ出ないように注意して静かに入水し、水深を確保しましょう。



(2) 分けつ開始後は、浅水管理に

除草剤の効果をも十分に発現させた後は、初期生育の「分けつ」を促進するために、浅水管理（2～3cm程度）にしましょう。

特に、天候が不順で、「分けつ」が不良の場合は、浅水管理で地温を高め、茎数を確保しましょう。



(3) 置き苗は早めに廃棄しましょう

置き苗はいもち病の発生源になります。田植え後は、すみやかに水田外へ除去しましょう。

3. 茨城県の試験研究主要成果を紹介します。

(1) 水稻品種「にじのきらめき」の高品質安定多収栽培方法 (R5 成果)

移植時期：5月中旬

5月中旬の移植で、多収であり、千粒重は重く、検査等級は概ね一等でした。

栽植密度：坪50株 (株間22cm)

坪50株及び坪60株で多収となり、品質は概ね同じでした。

基肥窒素量：10kgN/10a (9~12kg/10a)

基肥窒素量9~12kg/10aで、千粒重は重く、検査等級が概ね1等でした。結果から算出した、収量が最大となる基肥窒素量は10kgN/10aでした。地力に応じて加減しましょう。

追肥時期：出穂25~15日前

出穂前30~15日で多収であり、出穂前25~15日で千粒重が重くなりました。

登熟日数：46日 (44~49日)

帯緑率10%を目安として判定した登熟日数は46日(44~49日)であり、積算気温は1169°C(1105~1236°C)でした。収穫時期が遅れた場合、胴割粒やヤケ粒の増加による品質の低下が懸念されるため、適期に収穫しましょう。

★ 品種の詳細について ★

① 国立研究開発法人 農業・食品産業技術総合研究機構(農研機構)

中日本農業研究センターのHP:

<https://www.naro.go.jp/laboratory/carc/rainbow/nijinokirameki/index.html>



② 「にじのきらめき」栽培暦(2022年2月作成、茨城県農業総合センター):

https://www.pref.ibaraki.jp/nourinsuisan/noken/documents/nijikira_koyomi.pdf



(2) 指定混合肥料や鶏ふん堆肥を基肥のリン酸・カリとした多収米の栽培 (R5 成果)

多収米(「夢あおば」、「にじのきらめき」)において、基肥のリン酸・カリとして指定混合肥料や鶏ふん堆肥を使い、窒素は単肥による基肥及び追肥で栽培した結果、全量基肥栽培と同等の収量が得られました。

鶏ふん堆肥を使った場合、肥料費は全量基肥よりも安くなりました。

なお、鶏ふん堆肥を150kg/10a以上施用すると、多収米の子実によるリン酸持ち出し量と同等のリン酸を補給することができました。



(3) イネ縞葉枯病抵抗性品種の作付によるヒメトビウンカの保毒虫率低減効果

イネ縞葉枯病多発地域において、抵抗性品種である「にじのきらめき」、「ほしじるし」を栽培した場合、ヒメトビウンカの発生量は「コシヒカリ」の栽培圃場と同様だったものの、発病は認められませんでした。また、ヒメトビウンカ幼虫のイネ縞葉枯ウイルス保毒虫率(以下、保毒虫率)が低下し、低く推移しました。

《注意》イネ縞葉枯ウイルス保毒虫率の高い地点が認められています

令和6年1月下旬～2月に水田畦畔等のヒメトビウンカ越冬世代幼虫の保毒虫率を調査しました。その結果、県内16地点中8地点で、保毒虫率が5%以上（育苗箱施用等による薬剤防除を推奨する基準）となりました。

ヒメトビウンカの発生量が多くなると、イネ縞葉枯病が再び増加するおそれがあるため、引き続き総合防除により本病の防除対策を徹底して行っていくことが重要です。

* イネ縞葉枯病防除マニュアル（茨城県版）もご確認ください *

（茨城県農業総合センター農業研究所 令和3年5月改訂）

https://www.pref.ibaraki.jp/nourinsuisan/noken/documents/r3_shima_hagare_manual.pdf



4. ナガエツルノゲイトウ侵入・まん延防止対策

新利根川流域において、ナガエツルノゲイトウの発生・まん延、農地への侵入が確認されています。農業被害を防ぐためには、
①水路への侵入防止（例：河川からの取水口にフェンス設置）
②農地への侵入防止（例：農地への給水口にネットを取り付け）
③農地でのまん延防止（水稲用除草剤体系処理による防除）
が重要です。

また、茎や根の小さな断片からも再生・まん延するため、刈払い機は使わないでください。



ナガエツルノゲイトウ

【出典:特定外来生物の見分け方(環境省)より】

【農作業安全】 田植え作業での事故には十分注意しましょう！

- ①長靴は、靴底に十分きざみがあり、滑りにくいものを使用しましょう。
- ②田植機の点検やつまりの除去のときには、必ず、エンジン・クラッチを停止しましょう！
動いている植え付け爪には絶対に触らないようにしましょう。
- ③田植機の移動は運搬車を利用し、積み込み、積み下ろしはあゆみ板を利用しましょう。
- ④田植機を動かすときは、周囲に人がいないことを確認するとともに、後退時には、後方を十分に確認しましょう。
- ⑤水田に入るときは前進で、あぜに対して直角に進みましょう。
- ⑥水田から出るときは、水田の出入口に対して直角に、後進でゆっくり出ましょう。
補助作業者を機体前部にしがみつかせての、ほ場からの退出は厳禁です！
- ⑦苗の補給時は、田植機を停止させ、足元には十分注意するとともに苗の受け渡し時は、足元の安定を確認しましょう！
- ⑧子どもなど、作業員以外の人を乗せて運転しないこと！

